

湘桂撤退作戦

大溶江口筋竹山の戦闘

福島県 大宅 惣一郎

昭和二十年六月中旬、わが独歩第六十六大隊は百朋街、羅漢山を撤収して休む間もなく、柳州―桂林―興安と敵の追尾を振り切りつつ北上した。山間の地を除いてはほとんどが夜間行軍であった。興安付近を行軍していた七月十八日ごろと記憶するが、部隊は「急遽大溶江に急進して西方山地を占領し、わが退路を遮断せんとする敵を撃退すべし」という命令を受けたのである。そのときすぐ迎えのトラックが配車されたのを見ていかにも事態が切迫しているかが窺われた。

このころ、時を同じくして、若松歩兵第六十五連隊もまた同様の命令を受けている。少し長くなるが、ここに福島民友新聞「ふくしま戦争と人間」を見てみよう。それには次のように書かれている。

「―略―」

この時若松歩兵第六十五連隊は、第十三師団の「しんがり軍」の務めを果たし、桂林にたどり着いたばかりだった。七月十七日連隊は次の命令を受けた。

「第十三師団主力は全県付近にあり独立混成第八十八旅団を指揮下に入れ、西方より圧迫して来たる有力なる中国軍と交戦中なるも苦戦を重ねつつあり。桂林に到着せる若松歩兵第六十五連隊は直ちに全県方面に前進し同作戦を救援すべし」

桂林を単に通過するようにして連隊は急いだ、救援命令は続いてきた。

「桂林から全県への軍公路西側山地の五旗嶺（白砂舗西側の岩山）に進出しある敵は独立混成第八十八旅団（冲天）の週日の攻撃にも屈せずなお強烈に抵抗しあり、若松歩兵第六十五連隊は興安を経て急進し、この敵を速やかに撃滅すべし」

五旗嶺は五つの嶺がならぶ岩山、標高八百メートル前後で軍公路を抑えるのいい位置を占めていた。

五旗嶺の戦いでは連隊に配属されていた山砲連隊第九中隊の活躍も見逃せない。山砲を分解搬送して山頂まで担ぎ上げ、みごとな砲撃ぶりを見せ、「正面の最も困難なる敵陣を破砕して有利に展開させた」として特別表彰が行われている。

中国軍はこうして撃退され、五旗嶺の戦いは終わった。七月二十五日「敵を深追いすることなく反転を続行せよ」の命令で再び道をとリ直し速く上海への徒歩行軍が始められた」とある。

このようにして、我が部隊が布陣した筋竹山も五旗嶺に続く連山であったのである。大溶江に、到着すると同時に時を移さず本部の兵若干と金子中尉は陣地偵察のため道路左側の山に登り、尾根づたいに偵察して、再び軍公路に降りようとしていたとき、その山腹に休憩をしているらしい五、六人の敵兵を発見した。その中には上半身裸で休んでいる兵隊もいる。どうやら斥候らしい。発見されない内に射撃を加えるとあわてふためいていた敵は転ぶように山の斜面を逃げ降りて熊笹の中に入ってしまったて見えなくなってしまった。

敵のいたところに行つて見ると、上半身裸の兵隊が腹を打ち抜かれて死んでいる。胸に竹で作った認識票を掛けている。形は日本の認識票と同じ小判型であるが墨書きされたものらしく、既に墨が消えてしまつて判読もできない。背囊、水筒も青竹を輪切りにした水筒で竹づくめである。背囊の中を改めて見ると黒い布地に油通しをかけた薄い黒の上着と、何物も踏み通さないほど堅く作られた草鞋が一足、柄付手榴弾が二発、その外に紐を通した洗面器が一つあつた。洗面器は炊飯にも使用するらしい。

その日の夜、本部、第二中隊は大溶江西方、筋竹山に登り布陣した。山頂は岩山である。うすい表土がある所は短い雑草が生えていたが、陣地を構築することはできない山容だった。既に前面の山嶺には敵が布陣していてその距離は六、七百メートルぐらいか山を隔てる谷は峻険であり、到底われわれの布陣している嶺から下へは降ることができないし、また登ることもできない天険の要害だった。しかし敵の山からは谷底へ降りることができそうだった。敵の稜線には松の

木が黒々と立っていて、その後には重畳たる山脈が幾重にも重なり続いているように思われる。

二十日の早朝は小雨が降り、外被が濡れて肌寒い。

向こう側の敵兵が松の木の下で、歩哨を交代しているのが見える。雨が止んで明かるさを増すと急に霧がわいて流れる。すると、黒い便衣を着た敵兵が前面山腹を駆け下りて我が陣地の真下に取りついて見えなくなってしまう。それを合図にしたかのように双方激しい撃ち合いとなった。盛んに迫撃砲が撃ち込まれて岩山に炸裂して凄まじい音を立てる。残念だがこのとき我が方には砲が配置されていなかったので小銃、軽機、擲弾筒で撃ちまくる。一段低い岩盤上の本部にも盛んに迫撃砲が降りそそぎ、金子中尉も右腹部の細腰の所に破片創を受けられた。清野兵長が柴田中尉に「金子が休んでいるからマントを持ってやれ」と言われマントを取りに来たので渡したのだが、まさか負傷されたとは夢にも思わなかったのである。

激しい撃ち合いが続き、第二中隊では尊い犠牲者と多数の負傷者が続出した。柴田中尉も重傷を受けられ

たが首から両腕をつつて士気を鼓舞して頑張り続けた。

いつか砲声が止み、たまに小銃で狙撃してきたが静かになった。晴れ上がった夏の日もだんだん終わりに近づき太陽も西に回って敵のいる山上後方に赤々と輝いているのが見える。

戦線は互いに睨み合ったまま膠着状態で小康を保っているが、薄暮を期して今一と合戦あるのは必定である。しかし、この膠着状態を打破するには敵の據る前面山地を奪取して敵を撃退させなければならぬ。それには前方山嶽へ取り付く進路をどこに求めるかを定めなければならぬ。そのため金子中尉は先に磯貝軍曹が偵察に出て重傷を受けた稜線方向に偵察に出られた（金子中尉は前第二中隊長）。その後、扈從して進むとやや小高い台地があり、その上に登って見渡すと敵の稜線と我が稜線とを結ぶ橋のように一本の稜線がH型に横たわっているのが見える。その稜線の中程はちょうど駱駝の背の瘤のように高くなっていて小松の木が茂っている。

陽が陰つてきて敵の前方斜面は小暗くなつてよく見えないが、しばらく凝視していると敵が自陣地の稜線から駆け下りて連絡する、中間の稜線に取り付き一人また一人、各個躍進して駱駝の瘤の松の中に入って見えなくなる。なおも黙視していると、どうやら敵は一定の時間を置いて各個躍進をしているようである。

突然、金子中尉が双眼鏡を目から離さず「離れろ」と言われたので咄嗟に右側に寄ると、ビューンと一発狙撃される。続いてまた一発、金子中尉と自分との中間をビューンとかすめて通り、極めて弾着が良い。金子中尉が「ホッ」と小さく吹き殺然として立つたまま双眼鏡を右手にして左指先でいつものように口髭をなでながら、

「大宅このままで置くと大変なことになるぞ、薄暮を期して、あの瘤を突撃して奪るから直ぐ山を下りて、本部将校のメシを炊いてこい。柴田中尉に言いに行け」

と言われたので「ハイ」と答えて立ちかけるとまた一発狙撃される。「隊長殿姿勢を低くしてください。弾

着がいいです」と言うのと、「いいから早く行け、大丈夫だ」といいながら膝をつかれたので後に下がり、柴田中尉にその旨を告げ、直ちに柴田中尉、永井軍曹らの水筒を両肩にかけ飯盒を六ツ左右に提げて、滝のある谷底に下りて熊笹の枯葉と枯木を集めて飯盒炊飯をする。

気が気でない、ようやく飯盒の蓋から湯気が吹き出し始める。六人分の水筒へ水を入れてみると、突然山上でバリバリバリッと激しい銃声が鳴り出し、頭上を流れ弾がビューンビューンと通り抜けて行く。

一瞬間の中を電流のようなものがサーッと通り抜ける。天の知らせとでも言うのであろうか、思わず炊き上がらない飯盒を三つあて並べて、左右の飯盒のツルを中の飯盒のツルに掛け一纏めに^{まと}にして、それを両手に提げて急いで山腹を登り始める。中腹までは熊笹が密生していてそれに急なので中々登れない、息せき切つてやっと登り着くと、だれかが「大宅早く行け！金子隊長がやられたぞ」と叫ぶ。夢中で岩の上を駆け寄つて見ると柴田中尉の膝の上でウウンウウンと唸つてお

られる。

「隊長殿！大宅です、しつかりしてください」と叫ぶと苦しい声の下から「俺の手榴弾を寄越せ」と言われたので、「使ってしまったありません。頑張ってください」というと、「もう沢山だ。楽にしてくれ」：「早く」と言われたように思われたが声にならず、聞き取ることができなかつた。モルヒネが効いてきたのか苦痛の表情が消えて眠りに付かれる。

長い沈黙が続く、それも悲しい別れを覚悟しての涙の沈黙である。

その時まで肩に掛けて置いた六ツの水筒を肩から外して、金子中尉の水筒の栓を抜き、脈を取っておられる永井軍医の顔をうかがうと、小さく頷かれたので水筒を口に当てて含ませると間もなく息を引き取られた。時に昭和二十年七月二十日午後八時、私にとつては、生涯忘れ得ざる日となつたのである。

柴田中尉が負傷した両腕を金子中尉の胸におき男泣きに泣いておられる。みんな泣いた、涙が止め度なく流れる、しかし泣いてばかりはいられない。涙を振り

払つて担架を用意して担架にしつかり縛着して、軍夫四人に担架を持たせ午後九時ごろ、柴田中尉と真つ暗闇の中を下山する。熊笹の生い茂る急峻である。担夫も苦勞するが、両腕を負傷された柴田中尉も同様である、何度も滑り落ちられる。やつと飯盒炊飯をした滝の所に辿りつき、そこから沢の中をしばらく歩き林道に出て、樹木の覆う道を歩いていると白々と夜が明けた。

一面の霧で遠目がきかない、その霧の中から蹄の音が聞こえてくる。「敵か、見方か」とギョツとするが、やがて霧の中から姿を現わされたのは副官と參謀を帯同された米山閣下だつた。迎えに出られたのだった。「捧げ銃」をする。柴田中尉が進み出て戦況を報告される。勞いの言葉があり、金子大尉に対しねんごろに敬礼されて馬を返される。その間担架を下に置かず直立不動の姿勢で立っていた四人の中国人軍夫の姿には、いたく感激させられた。

大浴江口に到着して、負傷者を收容する民家の中に入り死体を清め、背囊の中から夏衣の襦袢と袴下を取

り出して着せ替えて茶毘に付した。炎天の中に煙が真っ直に立ち昇る。すると爆音が轟き飛来して来たカーチスP51二機が機銃掃射を浴びせつつ湘江上流に飛び去った。間もなく引き返して来ることだろう。

火葬の火を消すこともできないので、樹木の下の民家に一時退避することにして中に入つて見ると、その民家は軍の粉貯蔵庫だった。グルグルと巻き上げられたアンペラの中に粉がバラ積みされて屋根まで届くほど高く積み上げられていた。直径二メートル以上のものが、五、六個並んでいた。その粉と粉の間にしばらく休んでいると間もなく敵機は爆音を轟かせて帰って行った。

急いで火葬現場に行つて見ると異常なく火は燃えきつていたので安心したが、未だ炭が赤々と耀いていて取骨ができないので下を流れる湘江に行つて柴田中尉を手伝つて裸にして久しぶりに水浴した。綺麗な水だったことを覚えている。遺骨を拾つたのは午後四時から午後五時ごろであつたであろうか。遺骨は金子隊長が昨年馬山出発の時持つていたと言う外国産コーヒ

一缶(MGB)の中に丁寧に納骨した。

かくして軍命令により筋竹山を撤退したのは、七月三十日である。われに数倍する優勢な敵の攻撃に耐え、気力を奮い立たせて突撃を敢行して敵の陣地を奪い、不眠不休、十日間を守り通して、ついに敵の軍公路への進出を許さず、殿軍の務めを果たしたのである。これにより第十一軍は、七月二十八日桂林を撤退して全県に撤退したのである。

七月三十日夜、独歩六十六大隊は久しぶりに一体となり、戦友の眠る筋竹山に向かつて「戦友よすまない」と胸の中で手を合わせ、満斛の涙を呑んで、闇夜の軍公路を全県に向かつて転進した。

証言者は往時を偲びながら涙をたたえていた。

湘桂作戦発起より、広東、広西、湖南と戦い続け歩き続けて一年四カ月、兵員の三分の一を失う苦難の道程であつた。

【解説】

— 湘桂撤退作戦 大溶江口筋竹山の戦闘 —

昭和二十年四月、支那派遣軍は、

「湘桂沿線ノ撤収ニ関シテハ、第六方面軍ハ適時湘桂沿線ノ兵力ヲ撤収シ武漢地区及ビ北部粵漢線ノ要域ヲ確保シテ前任務ヲ続行ス」
と命ぜられた。

と同時に第二十軍は四月十五日、芷江作戦を發起した。さらに北部仏印での明号作戦実施のため支那大陸より兵力の移送（第二十二、第三十七師団）が続行していた。また、第十一軍主力撤収の後方整備に日時を要するという時期になった。ようやく打通した「満州、支那の軍官民と南方軍の將兵」との絆が切られることになることは派遣軍としても耐え難いことであった。昭和二十年二月中旬、広東・広西両省には第六方面軍が次のごとく配備されていた。

〔広西省〕

仏印には第三十七師団が第二十一師団と共に広西省に接してある。

第二十二師団は南寧付近より仏印に進行中。

第三師団は南寧—賓陽—來賓。

第十三師団は柳州—宜山—河池。

第十一軍司令部は柳州。第五十八師団、桂林。

第三十四師団、興安—全県。

〔広東省〕

第二十三軍、第四百・第四十・第二十七師団、海豊

・陸豊方面。

独立歩兵第八・第十三旅団は各曲江・広東。

第二十軍、第六十八師団、衡陽

第百十六師団、宝慶。

第十一軍は、五月二日—三日、左の反転計画を各兵

団に示した。

一 方針 軍ハ常ニ自主主動ノ態勢ヲ確保シツツ戦

面ヲ収約シ湖南方面ニ反転ス コノ間軍需品ノ後

送ニ遺憾ナカラシム

二 軍ハ第三十四師団（榕）及第三師団（幸）ノ警

備地区ヲ夫々獨立混成第八十八旅団（冲天）及独

立混成第二十二旅団（節）ヲシテ交替セシメタル

ノチ、先ツ第三十四師団ヲ次ニ第三師団ヲ湖南方面ニ転進

三 第十三師団（鏡）ハ反転作戰ニ参加セシメツ概ネ八月上旬頃湖南方面ニ反転セシム

四 軍ハ患者及軍需品ノ後送ヲ勸案シ逐次戦面ヲ収約ス 軍需品ノ後送完了予定次ノ如シ 柳州六月

十日 桂林七月十日 全県八月十日

五 五月下旬河池南寧ヲ撤シ、六月中旬宜山、遷江、来賓ノ線、六月下旬柳州付近、七月桂林付近、八月中旬全県付近ヲ撤シ概ネ九月下旬ニハ邕陽付近ニ至リ各部隊ヲ第二十軍司令官ノ指揮下ニ入ラシム コノ間好機ヲ求メテ敵ヲ反撃ス

◎体験記執筆者・大宅氏の所属は独立混成第二十二旅団であり、前記一のごとく第三師団の警備地（来賓・賓陽・南寧）と交替、第三師団は北上して湖南省に入る。時期は四にあるごとく、六月中旬遷江、来賓の線、下旬柳州付近、さらに七月桂林付近と、その経路と時期が示されている。独立混成第二十二師団は第三、

第十三師団の殿軍となり、最後に湖南省の第二十軍に収容されるべく、軍命令により運命づけられたことがわかる。

これを裏づけるように、公刊戦史によると、五月五日、第三師団の歩兵第六十八連隊（岐阜）は来賓地区から北進行動を始めた（註、遷江―来賓道には歩兵第六連隊（第三師団の名古屋編成）と柳江流域の武宣に
は独立混成第二十二旅団がいる）。

松本氏執筆の体験記「芷江作戰撤収」解説にも記述したが、五月中旬、中国軍は第二十軍各兵団を圧迫しつつあり、差し当たり第三十四師団等を以て全県付近より対処した。また、第十三師団の興安付近集結を早め、六月十五日ごろと希望した。

第十一軍は「我が芷江作戰部隊（第百十六師団、第六十八・第四十七師団等主力）を猛追中の敵三十個師が湘桂公路に進出すれば、第十一軍の背後が遮断されるばかりでなく、支那派遣軍全軍の作戰に重大影響を与える」とし、でき得る限りの兵力を急遽北上させようとした。そのため、第十三師団歩兵第六十五連隊（会

津若松、服部卓四郎大佐)を服部支隊とし、軍直轄として柳桂方面より反転援護を命じた。

当時、欧州ではドイツが降伏、日本のみが全世界を相手とし戦争を継続せねばならず、また芷江作戦中止の総軍命令が重なった。

第三師団各連隊は遷江―柳州と撤退し、服部支隊は柳城、柳州線へ後退。

第十一軍司令部は六月十九日、後事を独立混成第二十二旅団に托し柳州を撤し、桂林に向かった。そして第三師団はすでに全県に達し、柳州付近は、同旅団のみとなり、七月一日ころ柳江を渡河して桂林に向かった。

七月中・下旬、敵は第十一軍撤退の退路を遮断し攻撃を加え、歩兵第六十五連隊服部支隊と独立混成第二十二旅団は、大溶江口付近の激戦を交え、桂林で軍撤退援護の第五十八師団を收容することができた。

体験記の大溶江口、六漕嶺、筋竹山の戦闘とはこの

一連の戦闘で、これにより第十一軍の撤収が完うされたのである。支那派遣軍の戦闘主力の第十一軍は既に第五十八師団(広)、独立混成第二十二旅団、同第八十八旅団のみとなり、独立大隊十八個のみとなった(一時、歩兵第六十五連隊配属)。

大溶江口を撤収した筈原第十一軍司令官は全県に到着したが、全県もまた柳州、桂林同様一カ月確保しなければならなかった。指揮下兵力は前述のごとく一個師団、二個旅団のみであり、省境を越えれば広大な湖南の沃野であり、湖南における撤収作戦は容易ではない。

当時、撤退する部隊に対して敵は虜接して来ていた。軍司令官はこれを逆用、全県北の独立高地に軍主力(第五十八師団・独混第二十二旅団)を密林に伏せて置き、一部(独混第八十八旅団)をもって敵を誘致して後退させた。従来、重慶軍は自ら部落に放火して「日本軍が放火した」と言っていた。

この時まで日本軍は放火を厳禁していたが、奇策を

もつて、全県に放火した。敵は火の手が上がるや、重慶軍が占領せりと判断し大挙して侵入してきた。十二日仏曉、我が軍は全火力をもつて邀撃、一挙に攻撃し、敵は算を乱し退却、同日昼には敵影を見なくなった。部隊は十四日、全県に帰ったが、翌十五日、軍司令官は「終戦」を知った。これが、第十一軍最後の戦闘、体験記にある歩・砲・戦車協同の全県反撃戦である。